



野生生物共生センターは、平成28年4月に福島県環境創造センター（三春町）の附属施設として、安達郡大玉村にある県民の森内に開所しました。

旧鳥獣保護センターでおこなっていた傷病鳥獣救護業務はそのまま引き継がれ、新たな役割として、放射性物質などの環境モニタリングを含む調査研究業務、感染症検査など保護管理業務、野生動物や生物多様性に関する環境学習・普及啓発、という4つの機能を備え、専門スタッフが常駐しています。

私たちヒトと野生動物との関係や、野生動物とその生息環境が身近に繋がっていることなどを、様々な観点から伝えていくことを目的としています。



森ではキビタキやオオルリ、ホトトギス、ヨタカなど個性的な夏鳥たちがにぎやかに鳴き交わし、田んぼもすっかり青々と色づきました。この豊かな福島は自然と、私たちヒトが共に歩いていくための架け橋になれるように、ささやかながら様々な情報と学びの場を提供できればと考えております。どうぞよろしくお願い致します！

<p>野生生物共生センターでは、野生動物の剥製やパネルの展示、映像放映等をおこなっており、入館料無料で自由に見学・閲覧できます。</p> <p>救護棟、野外訓練場は立入禁止ですが、屋内訓練場にて野生復帰訓練をおこなっている場合は、観察コーナーからその様子をご覧いただけます。</p> <p>詳しくは... <input type="button" value="HP"/> <input type="button" value="環境創造センター"/> <input type="button" value="検索"/> <input type="button" value="戻る"/></p>	<p><b>発行：福島県野生生物共生センター</b></p> <p>〒969-1302</p> <p>福島県安達郡大玉村玉井字長久保 67</p> <p>電話 0243-24-6631</p> <p>(9:00~17:00 月曜休館日)</p>
--	--

本誌内の文章・画像等の無断転載および複製等の行為はご遠慮ください。

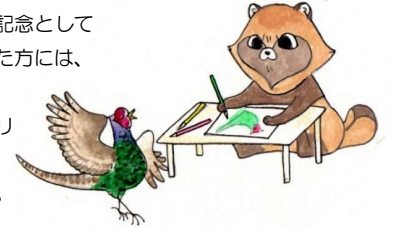
## 本気のどうぶつめり絵大会」開催！

野生生物共生センターでは人と野生動物との適切な関わり合いのために、様々なイベントや館内展示を通して、環境学習、普及・啓発活動を実施しています。

今回は5月3日～7日のゴールデンウィーク期間中に開催した「本気のどうぶつめり絵大会」のご報告です。まずは動物に対する興味を持っていただくために、動物のはく製標本を観察しながらめり絵をおこないました。観察が進んでいくとよく知っている動物でも「ここはこんな色だったんだ」「こんな体をしていただんだ」と新たな発見があり、子供だけでなく大人たちもつい夢中になっていました。

開催期間中は総勢 227 人の方々に来館していただき、127 枚の作品が出来上がりました。館内では現在その作品の一部を展示しています。参加者の皆さんには記念として動物の写真のしおりをプレゼントし、最優秀作品及び優秀作品を描いた方には、本物の鳥の羽で作ったカードをプレゼントしました。

また、当日は動物に関するクイズや、救護棟で動物の看護・リハビリなどを行なっているスタッフの仕事内容を紹介しました。今後も動物に親しんでいただけるイベントを順次開催していきます。開催情報についてはホームページをご覧ください！



**夏休みイベント情報**  
 期間：7/15(土)～8/24(木)  
 内容：鳥のくちばし図鑑の作成、鳥の羽の工作  
 備考：参加無料・事前予約不要

## 館内展示紹介

ここでは館内の展示について紹介していきます。第1回目は、「わたしたちとふくしまの自然環境」という映像展示についてご紹介します。映像は3種類あります。

### 「野生動物と放射性物質の関係」

福島県が実施している野生動物に関する放射性物質のモニタリングや調査研究について紹介しています。

### 「ふくしまの野生動物」

交通事故等の人との関わり合いによってケガをしてしまった野生動物や人里に出てきた野生動物によって人が受ける被害等を通して、人と野生動物との適切な関係性について伝えています。

### 「ふくしまの里山」

福島県レッドリストに登録されている「サシバ」という鳥が減少している事例を通して、里山における生物多様性とその保全の重要性について伝えています。



サシバ  
*Buteo indicus*





# 業務紹介 第一回「高病原性鳥インフルエンザ」について

野生生物共生センターの業務の1つとして、『野生動物由来感染症に関する調査』がありますが、「高病原性鳥インフルエンザ」の検査についてもその業務の一環として実施しています。

具体的には、①衰弱した野鳥など鳥インフルエンザ感染が疑われる場合の対応、②死亡野鳥の死因特定・鳥インフルエンザ簡易検査の実施、③県自然保護課や各地方振興局の鳥インフルエンザ検査に関連する業務への協力などを行っています(表)。

特に平成28~29年シーズンは野鳥における高病原性鳥インフルエンザ確定件数が22都道府県で218件※1と多く、福島県内でも平成28年12月に2件の発生が確認されました。※2

県内ではその後の発生は確認されず、平成29年5月11日24時をもって全国での野鳥の監視体制も対応レベル3から対応レベル1に引き下げられましたが、今後も気を緩めず監視活動を続けていきます。



表

平成28年度	
感染症検査等の対応実績	計69件
現地対応	13件 ※1
持込検査	22件 ※2
助言等	34件
※1 (確認後、傷病対応となった案件を含む)	
※2 (現地対応後持ち込まれた案件を含む)	

※1 環境省 [http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird\\_flu/index.html](http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/index.html) (平成29年5月12日 16:00現在)

※2 福島県 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16035b/yatyouoriinnfuru.html>

## 鳥類の識別 「ハト」のなかま

日本で生息が確認されているハトのなかまは8種類ですが、野生生物共生センターに搬送されることが多いのはこのうち、ドバト(カワラバト)、キジバト、アオバトの3種類です。

ドバトは人工品種が野生化したもので、集団性で人をあまり恐れず、羽毛の色や大きさも様々です。

キジバトは森林性で、集団よりもつがいで生活することが多い種類です。

住宅街でも目撃することがありますが、神経質で近づくると素早く飛び去ります。よく聞く「デーデーポッポー」はキジバトの鳴き声です。

アオバトは色の美しさだけでなく、世界でもまれな海水や温泉水など塩分を含む水を飲む鳥で、生態があまり解明されていない謎めいた鳥なのです。

日本列島と中国の一部だけに分布し、国内では留鳥として主に低地から山地の森林に生息します。とても繊細で、救護がとても難しい種類です。



キジバト



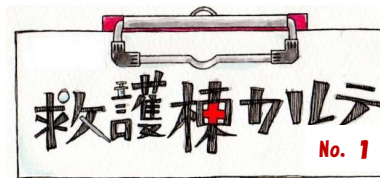
アオバト



ドバト



ドバト  
(白色型)



昭和57年に開所した鳥獣保護センターは、野生生物共生センターの救護棟として生まれ変わりました!

今後も、人間活動の影響が原因で傷ついた野生動物たちを保護・治療・リハビリし、再び野生へ帰す活動をおこなっていきます。

(※救護棟および野外訓練場は立入禁止です!)

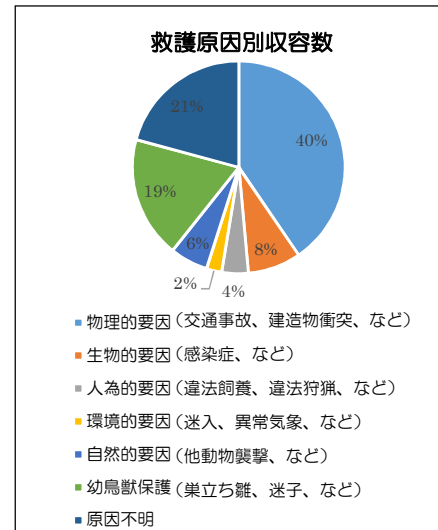
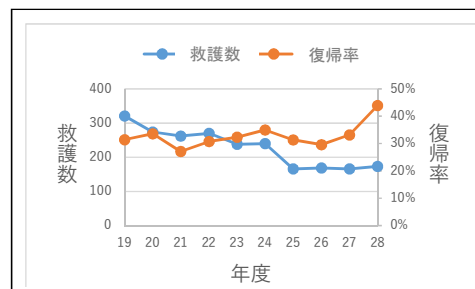
### 平成28年度救護実績

	鳥類(種数)	哺乳類(種数)
搬入数	173 143羽(49種)	30頭(4種)
野生復帰数	76 66羽(25種)	10頭(1種)

※野生復帰数には27年度以前の入院動物も含む

鳥類のうち、最も救護件数が多いのはフクロウ(15羽)、次いでノスリ(10羽)、オオハクチョウ(9羽)でした。哺乳類では、ホンダタヌキ(26頭)が全体の8割以上を占めています。救護原因で最も多いのは、鳥類・哺乳類ともに交通事故でした。道路を利用するのは私たちヒトと車だけではないのです。

### 搬入数と野生復帰率の推移



平成19年度には321件あった救護件数も、昨年度には半数ほどに減少しました。救護数の減少には様々な要因が考えられるため、「傷ついた動物が減った」と安易にとらえることはできませんが、復帰率は30%以上を維持しています。



### ただいまリハビリ中!



4月に郡山市で交通事故に遭い、保護されたノスリです。右翼を骨折していましたが、治療が終わり、6月に訓練場でリハビリを開始しました。経過は順調です!

### 野生復帰しました!

昨年12月にいわき市で交通事故に遭ったホンダタヌキです。頭と全身を強く打撲したようで、平衡感覚に異常があり、起立もできない状態でした。徐々に元気が戻り、1月下旬にやっと上半身を上げてお座りの姿勢がとれるまでに回復しました。起立・歩行ができるようになるまでは時間がかかりましたが、3月に訓練場へ解放されると、ゆっくり歩きながら身を隠そうとする野生の本能も見せてくれました。そして4月末、ようやく元のすみか近くの森へ元気に走って帰って行きました。もう二度と事故に遭わないようにね!



↑ 入院時の様子



↑ 訓練場にて